

2023年度日本数学会出版賞受賞者のことば

岡本 健太郎 氏 『アートで魅せる数学の世界』（技術評論社，2021年）

この度は、大変光栄なことに『アートで魅せる数学の世界』が日本数学会出版賞という素晴らしい賞を受賞することとなり、非常に感激しております。数学の魅力を「アート」という視点で多くの方に伝えるために、この本を執筆しました。この受賞は、私にとって大きな励みとなります。

数学とアートは、一見すると異なる領域のように思われるかもしれませんが、実は深いつながりがあります。私たちが「美しい」と感じるものには、おおよそ「比率」や「曲線」、「対称性」、「繰り返し」など数学的な構造が見え隠れしています。本書で、数学をアートやデザインといった視点でまとめ、数学本来の面白さや美しさを「体感」していただけるように工夫しました。例えば、ストリング・アートの章で登場する美しい曲線を、数学が苦手な方でも簡単に描けるように、Excelを使用した作成方法を事細かく載せています。また、パラパラ読んでも楽しんでいただけるように、ちょっとした歴史的な背景や非常に多くの図がフルカラーで収録されているのも本書の大きな特色だと思います。これから数学を学んでいく中学生や高校生にも是非読んでもらいたいと思っています。さらに、数式もしっかり追っていきたいという方のためになるべく数式や証明は省略せずにまとめてあるので、満遍なく数学が楽しめるのではないかと思います。また、本賞を受賞することで、多くの方々にとっては新たな視点となり、数学への関心が高まるきっかけとなることを期待しています。

最後に、この本の執筆には多くの方々の支えがありました。編集者やデザイナーの方をはじめ、出版に携わった全ての方に感謝を捧げます。数学とアートの結びつきを伝えるこの本が、多くの人々に数学の美しさと面白さを伝える一助となることを願っています。

岡本 健太郎
和から株式会社
数学講師，切り絵アーティスト

* * * * *

飯高 茂 氏

日本数学会出版賞受賞の喜び

日本数学会の出版賞をいただくことになり大変光栄なことで貴学会に篤くお礼を申し上げる次第である。無職の自分にとって大きな励みとなった。

いささか昔のことになるが、70歳の定年が迫る頃は危機的な精神状況に追い込まれた。先輩方が最終講義を行い教授職から離れていくのを見る機会が多くなったからだ。多くの方は淡々として定年を迎えたようだが、ある別れの宴で、定年経験者が「これから定年を迎える人は不安な気持ちになっていると思う。しかし定年になってみるとこれもいいものだ。不安になるものではない」。こんなことを言われたことがあり大いに励まされた。

私はこの場を借りてこれから定年を迎える数学教授たちに対して次のように言いたい。

定年になると良いことも多い。数学に没頭する時間をいくらでもとれる。場合によっては出版賞をもらえるよ。

私が当初漠然とした不安感の中で考えたのは、高校生などの若い世代に数学を面白く分らせることができればいいな。そのため、高校生のための数学の面白い本が書ければいい。というところだ。

当時私は夜になると研究室にひとり残っていることが多かった。そして放送大学のラジオ放送で文系の学問の講義を聞くことがあった。ときどき感動するような講義もあった。それが縁となり、定年半年前に放送大学に選科履修生として登録した。

放送大学は50を超える学習センターを持っている。自宅から自転車で30分の位置に放送大学東京多摩学習センターがあったことも好材料だった。入学金9000円を払うと1年間有効、1科目ごとに11000円で試験が受けられ合格すれば単位がもらえる。センターにある図書館、パソコン、学生控え室が自由に使えて大学院科目を含む教材はネット上ですべて視聴可能。定年後はほぼ毎日弁当を持って学習センターに通学するようになり生活のリズムができた。

また神田の書店「書泉グランデ」の7階で一般市民向けの数学の講義をする機会を与えられた。受験数学でない数学を講義し自分たちも数学の研究をすることを目標にしたので、「数学の研究をはじめよう」という題で夕方に2時間の講義を隔週行うことにした。熟年世代が多かったが小学1年生の参加もあって、彼は欠かさず一番前に座り活発に質問してくれた。20名前後の出席者が毎回あったが、2020年に新型コロナウイルス感染症の蔓延のため中止のやむなきに至った。

その代わりに Zoom ゼミ「数学大好き」が週 2 回開かれるようになった。これらをベースに雑誌『現代数学』に連載を続け、これらを新シリーズ『数学の研究をはじめよう』（現代数学社）にまとめた。13 巻まで出したいが、2023 年に VIII が出たところで息切れが心配になった。

その上カルチャーセンターで大学数学の講義やゼミをいくつもするようになり、そこで優秀な小学生や中学生から刺激を受けることも多い。

こうして定年後の憂鬱は無くなり充実した日々を過ごしている。

ここで日本数学会出版賞を受けたことを糧として一層努力したい。

飯高 茂

放送大学選科履修生

学習院大学名誉教授

* * * * *

梅田 亨 氏

この度、栄えある日本数学会出版賞をいただき、まことに有難うございます。ご推薦下さった方々並びにご尽力下さった方々に心より感謝申し上げます。

自分の著作について思うところを、限られた紙幅で述べるのはむずかしく、そもそも何に焦点を絞るのがよいのか判りませんが、少しばかり思い出してみます。

私自身が数学に興味をもったのは、そこそこ早く、本当に子供の頃でしたが、中学・高校では、曲がりなりにも大学の教科書などを読み、独学することが当然の学び方になっていました。そこでは常にいろんな種類の疑問に出会いつつ、判らないことも楽しみとして、拙いながらも数学に思いを馳せていたのでした。

大学に入ると、圧倒的に良い環境で勉強できるようになりましたが、先生にだって教科書にだってアヤシイところがあり、鵜呑みにはできない。自分の疑問を解決するには、自分自身が納得できるところまで考えないと仕方がない。そういうアタリマエを確認することにもなります。結局のところ、やはり独学以外に数学を学ぶ方法はないのです。

研究レベルになれば、普通に、先行論文の欠点や改良点にも目が行き、それを手がかりにものを考える。それが「数学」という言語が、「母語」となって自分の身に付くプロセスの一部でしょう。

同じことは、基礎的な「教科書」にだって見出せる。講義をするようになると、学

生時代に比べて、その粗に目が行く頻度は相当増します。しかし、研究の先端を扱う「論文」相手とは違い、改善したからといって「研究」にはならない。だから多分、人々もそこを深く追求することが少なく、多くは講義などで少々の工夫を試す程度にとどまるのでしょう。さらには、教科書にないことを講義されては学生も迷惑という事情もあるのかもしれませんが（いや、昔はそれが普通だったのに、大学も軟弱になってしまったのでしょうか）。

そのような日々の疑問の積み重ね（子供の頃からなので相当の蓄積がある）を、幸いにも、自分の書くものを通じ、幾分か解消する機会を得ることになりました。正面切った「教科書」ではありませんが、そういう疑問のいくつかに焦点を当てることができました。それが、少々の存在価値と評価を得て「出版賞」をいただいたのは、本当に大きな財産となり、励みとなります。

この受賞を一つの区切りとして、数学の一層の「たのしみ」が伝えられるように、今後とも精進を重ねたいと思っています。

梅田 亨
大阪公立大学数学研究所